



Title	勅撰三集の研究
Author(s)	山谷, 紀子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44766
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	やま や のり こ 山 谷 紀 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 8 3 0 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	勅撰三集の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 後藤 昭雄 (副査) 教 授 高橋 文治 助教授 荒木 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は9世紀初めに相次いで編纂された三つの勅撰漢詩文集—『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の、いわゆる勅撰三集に関する研究である。おおきくは第一編、「『懷風藻』から勅撰三集へ」、第二編「勅撰三集と政治背景」の二つから成る。

勅撰三集は平安朝の最初期に成立した詩文集であるが、同じ漢詩集として奈良朝後期に『懷風藻』が編纂されていた。両者は日本古代の漢詩文集として基本的性格を同じくするものであるが、一方が奈良時代の、他方が平安時代の成立であることから、これまで別個に考察がなされてきた。そうした従来の研究に対して、双方を視野に収めて、考察したものが第一編である。第一章「勅撰三集の応製的表現」、第二章「小野岑守考」の二章から成る。『懷風藻』、勅撰三集ともに古代律令制を基盤とするものであることから、天皇の下命が、あるいは天皇の詠詩が臣下の詩人たちの詠作の契機となる場合が多いのであるが、そうした場での詠詩には、天皇の恩徳を称賛する詩句が挿入される。筆者はこれに着目して、「応製的表現」と名付けて、こうした表現の『懷風藻』から勅撰三集への継承、あるいは変化の様相を追跡したのが第一章である。第二章では勅撰三集の代表的詩人の一人として小野岑守を取りあげ、その作品に焦点を絞って同様の視点から考察を加えている。

第二編では文学と歴史との相関を、勅撰三集を成立させた詩壇の形成、および詩の表現と歴史書の表現を中心に考察している。

第一章「勅撰三集と東宮」は勅撰三集の時代に相当する桓武、平城、嵯峨、淳和、仁明の五代の天皇の東宮時代に着目し、各東宮自身の詩作活動の有無、またこれと関連してその周辺に詩壇が形成されていたか否かを分析し、その文学史的意義を述べている。第二章「勅撰三集と歴史書」は、集中の征夷詩や仏教詩の表現と『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』等の史書の叙述あるいは引用された書簡の表現との関連を明らかにしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

第一編の表題となっている『懷風藻』から勅撰三集へという視点は、従来の研究が看過していたものであり、この基本的視点の設定は評価できるものである。従来は奈良時代、平安時代という時代区分にとらわれて、両者を併せて

考察するという視点に欠けるものがあった。本論文はここに着目している。またその分析の対象を詩句中の「応製的表現」に求めたことも、『懷風藻』、勅撰三集ともに天皇を中心とし、その周辺にあった律令貴族、官人たちによって詩文が制作されていたことを考えると、納得されるものである。考察の結果、両者の間に、作者に継続する点のあることを明らかにし、また詩句表現においては『文華秀麗集』を一つの画期として変化が見られることを明らかにした。

『懷風藻』から勅撰三集へ」という視点は有効である。本論文はその可能性を示している。

第二編では第一章の東宮詩壇への着目は従来の研究の盲点を衝いたものである。勅撰三集については、勅撰集であるということから、これまでは専ら天皇、特に嵯峨天皇が中心に置かれていた。それはそれで当然であったが、本論文は東宮の詩作活動及びその周囲に形成されていた詩壇に着目して考察を進めて、従来の研究からは見えてこなかった諸点を明らかにしている。新たな視点を提示したものである。また第二章における、勅撰三集詩の表現の形成に史書の表現との相関を考えるということも、これまでほとんどなされていなかった点である。

ただし、緻密な思考、論理的叙述において欠ける所のあること、文章表現に拙さの見えることなどには不満が残り、一層の精進が望まれるが、上記の点を評価して、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。